第３節　６区④の調査

１．調査の経過

６区④は、６区②の南側に位置する調査区で、平成 20 年度に発掘調査を実施した。

調査区全体を一度に掘り下げるには、排土を十分に処理できる場所が近くになかったため、調査区を二分して、東側を発掘後に天地返しをして西側を発掘することとした。調査区の設定にあたっては、南側の道路や北側の水路に影響が出ないようにするため控えをとり、また、壁面の崩落を防ぐため、安全勾配をとって発掘したことにより、結果的に東西長約 80m、南北幅約７～８ｍ（下端幅で約３～４ｍ）の細長い調査区となった。発掘調査面積は 580㎡である。

５月下旬から調査区東側の表土や旧伊努谷川による堆積砂礫層を重機で掘削し、標高約３ｍまで下げた。この時点では山持遺跡全体で見られる黒色腐植土層（基本層序Ⅱ層、いわゆる「オモカス層」）は確認できず、６区②の遺物包含層（Ⅳ層）上面とほぼ等しいレベルで、黒色土（第 18 図Ⅰ -17 層）が見られた。このことから、当調査区では黒色腐植土層は旧河道によって削らて残っておらず、すでに遺物包含層に達したと考え、５月 30 日から人力による掘削を開始した。黒色土上面では杭列を検出し、これらの記録をして、黒色土を掘り下げたところ標高約 2.5 ｍで腐植土層上面を検出した。６区②のレベル（標高約 3.2m）と比べかなり低く、腐植土層は旧河道で削られたのではなく、周囲と比べて落ち込んだ部分に堆積していたことがこの段階で明らかになった。腐植土層下面からその下層の黒色粘質土では弥生時代後期末頃～古代の遺物が出土し、その下の灰色系シルト層上面では溝、土坑を検出した。これらの遺構を完掘・記録し、調査区内を 10cm 間隔の等高線を測量して、調査区の写真撮影を行った。

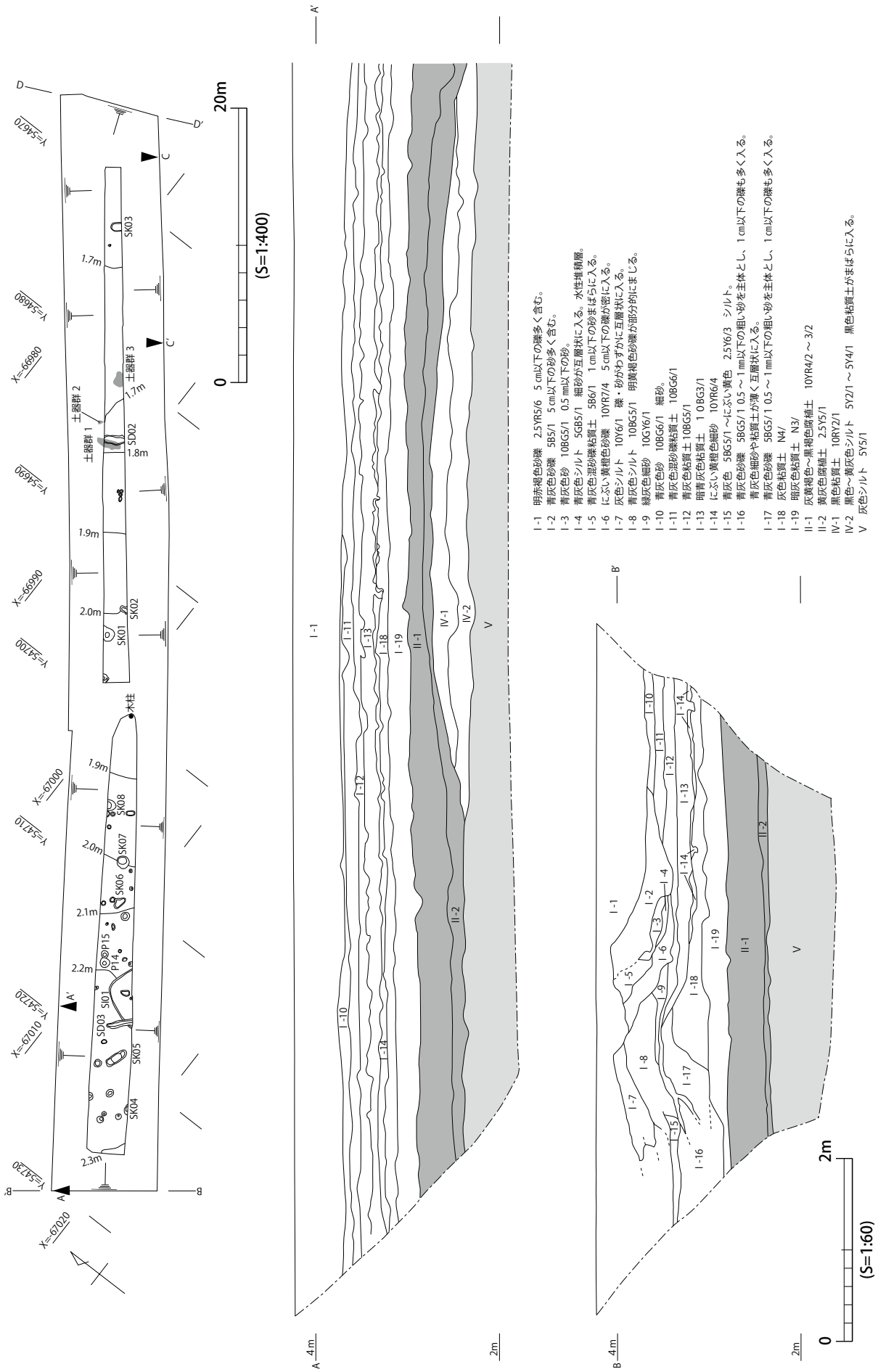
調査区西側は重機により腐植土の上半部まで掘削し、７月 14 日から人力で掘削作業を行った。腐植土下面から下層の黒色粘質土層では弥生時代後期末頃を主体とする遺物が出土し、灰色系シルト層上面で竪穴建物状遺構や溝、土坑等の遺構を検出した。８月７日にはこれらの遺構を完掘し、調査区の完掘写真を撮影した。その後、調査区壁面の土層図などを作成し、８月 12 日には三瓶自然館の中村唯史氏より調査区における地質環境や土層の堆積状況について調査指導を受け、８月 18 日から重機により調査区の埋め戻しを行った。

２．基本層序

調査区の基本層序は大きく見て４つに大別した。

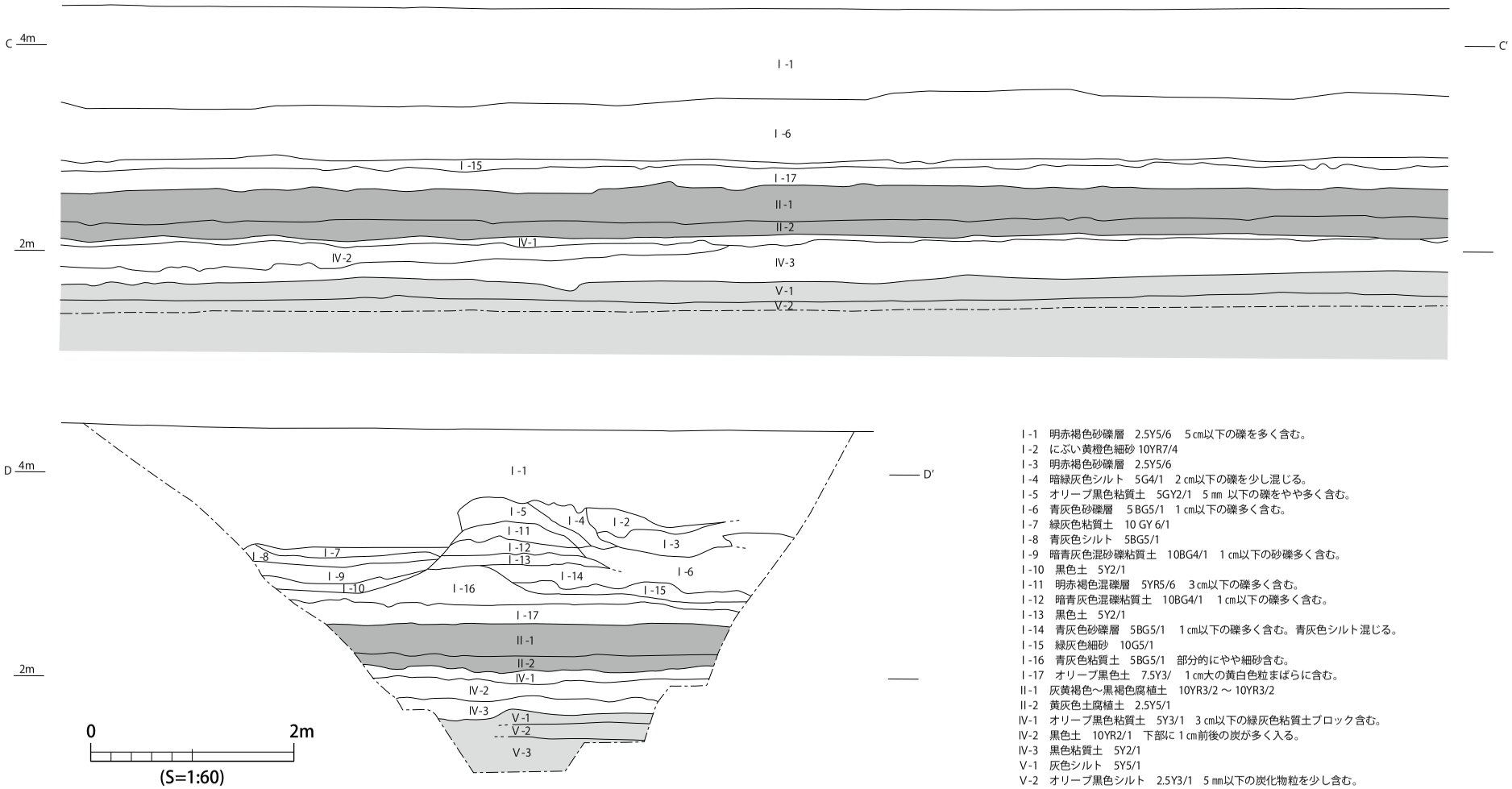
Ⅰ層は近世以降の耕作土層や造成土、旧伊努谷川による堆積層などである。これらについては基本的に重機による掘削段階で除去している。ただし、前述したように、調査区東側では第 18 図Ⅰ -17 層が遺物包含層になる可能性を考え、人力で掘削をした。なお、第 17 図のⅠ -14 層、第 18 図のⅠ -15 層は河川の氾濫よって堆積した細砂層と考えられ、他の調査区でも同様の層が認められる。本調査区から約 400 ｍ東に位置する２区では、２時期の洪水砂が確認されており、それらのいずれかに対応する可能性が考えられる。

Ⅱ層は未分解の植物質のものが堆積した黒色腐植土層で、「オモカス層」と呼ばれるものである。この層序は、この地点がアシなどが生い茂る低湿地であったことを示している。出土遺物が少ないため明確な時期は特定しづらいが、中世頃に形成されたと考えられる。

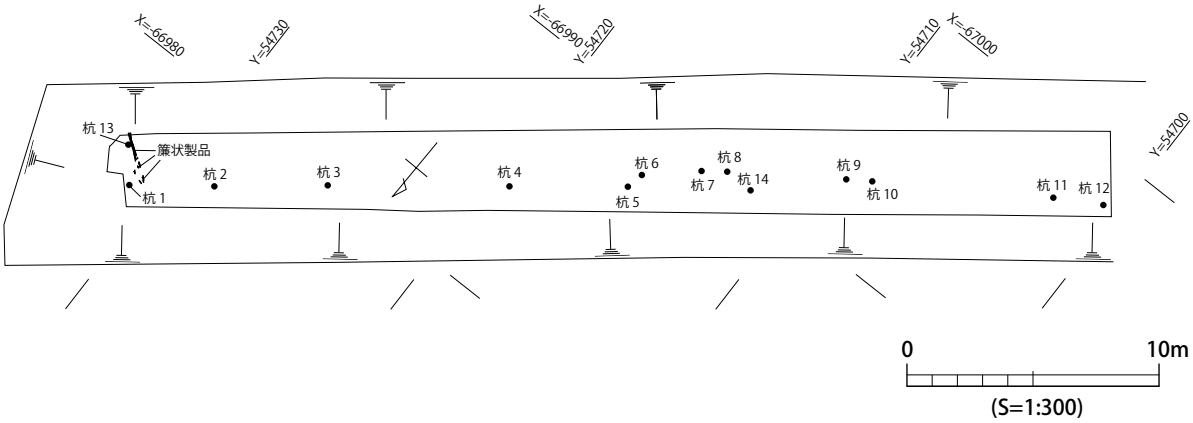


第 17 図　6 区④遺構図、北壁（A-A'）・西壁（B-B'）土層断面図

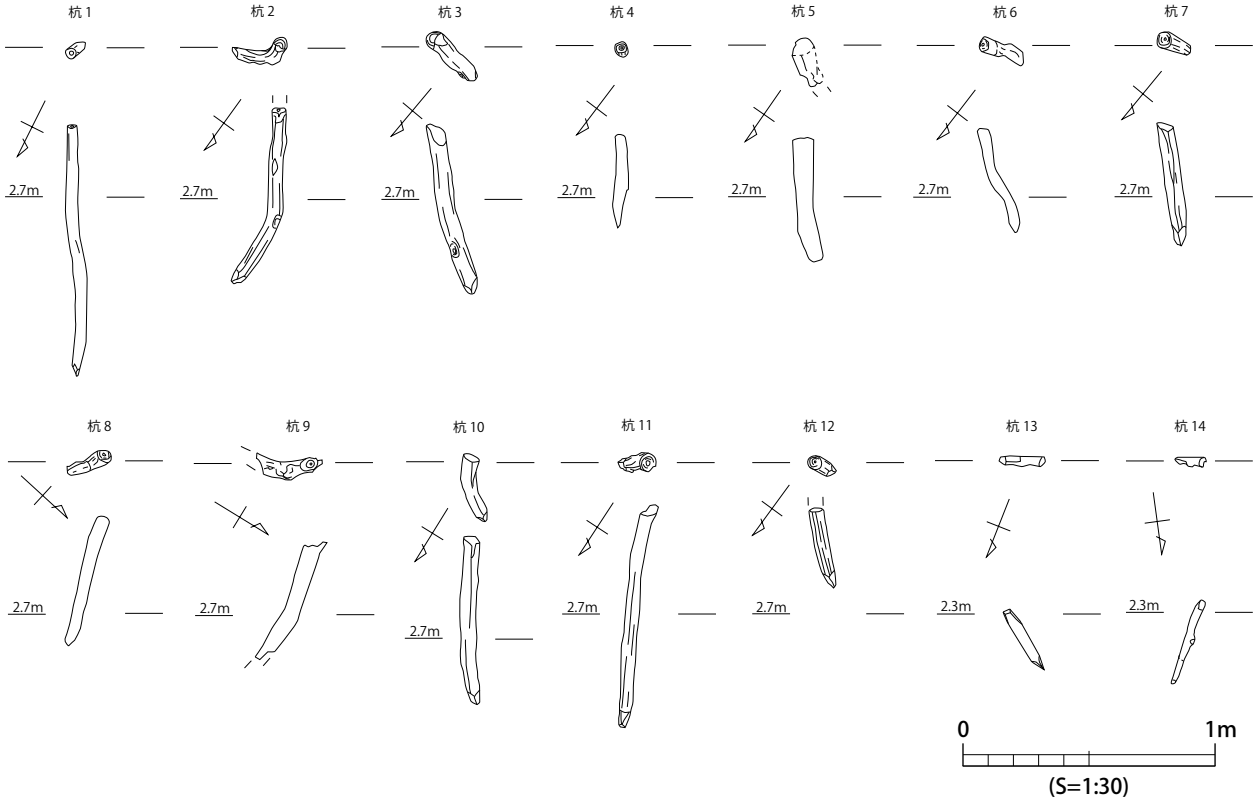
第18図　6区④南壁（C-C'）・東壁（D-D'）土層図



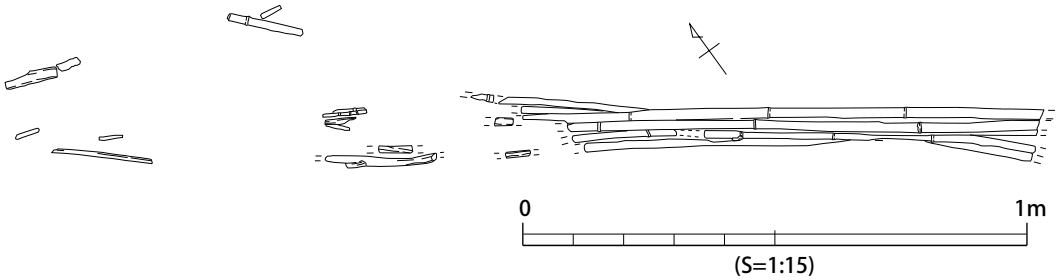
Ⅰ-1　明赤褐色砂礫層　2.5Y5/6　5㎝以下の礫を多く含む。
Ⅰ-2　にぶい黄橙色細砂 10YR7/4
Ⅰ-3　明赤褐色砂礫層　2.5Y5/6
Ⅰ-4　暗緑灰色シルト　5G4/1　2㎝以下の礫を少し混じる。
Ⅰ-5　オリーブ黒色粘質土　5GY2/1　5㎜ 以下の礫をやや多く含む。
Ⅰ-6　青灰色砂礫層　5BG5/1　1㎝以下の礫多く含む。
Ⅰ-7　緑灰色粘質土　10 GY 6/1
Ⅰ-8　青灰色シルト　5BG5/1
Ⅰ-9　暗青灰色混砂礫粘質土　10BG4/1　1㎝以下の砂礫多く含む。
Ⅰ-10　黒色土　5Y2/1
Ⅰ-11　明赤褐色混礫層　5YR5/6　3㎝以下の礫多く含む。
Ⅰ-12　暗青灰色混礫粘質土　10BG4/1　1㎝以下の礫多く含む。
Ⅰ-13　黒色土　5Y2/1
Ⅰ-14　青灰色砂礫層　5BG5/1　1㎝以下の礫多く含む。青灰色シルト混じる。
Ⅰ-15　緑灰色細砂　10G5/1
Ⅰ-16　青灰色粘質土　5BG5/1　部分的にやや細砂含む。
Ⅰ-17　オリーブ黒色土　7.5Y3/　1㎝大の黄白色粒まばらに含む。
Ⅱ-1　灰黄褐色～黒褐色腐植土　10YR3/2 ～ 10YR3/2
Ⅱ-2　黄灰色土腐植土　2.5Y5/1
Ⅳ-1　オリーブ黒色粘質土　5Y3/1　3㎝以下の緑灰色粘質土ブロック含む。
Ⅳ-2　黒色土　10YR2/1　下部に1㎝前後の炭が多く入る。
Ⅳ-3　黒色粘質土　5Y2/1
Ⅴ-1　灰色シルト　5Y5/1
Ⅴ-2　オリーブ黒色シルト　2.5Y3/1　5㎜以下の炭化物粒を少し含む。
Ⅴ-3　灰色シルト 7.5Y5/1



第 19 図　6 区④Ⅰ・Ⅱ層検出遺構図

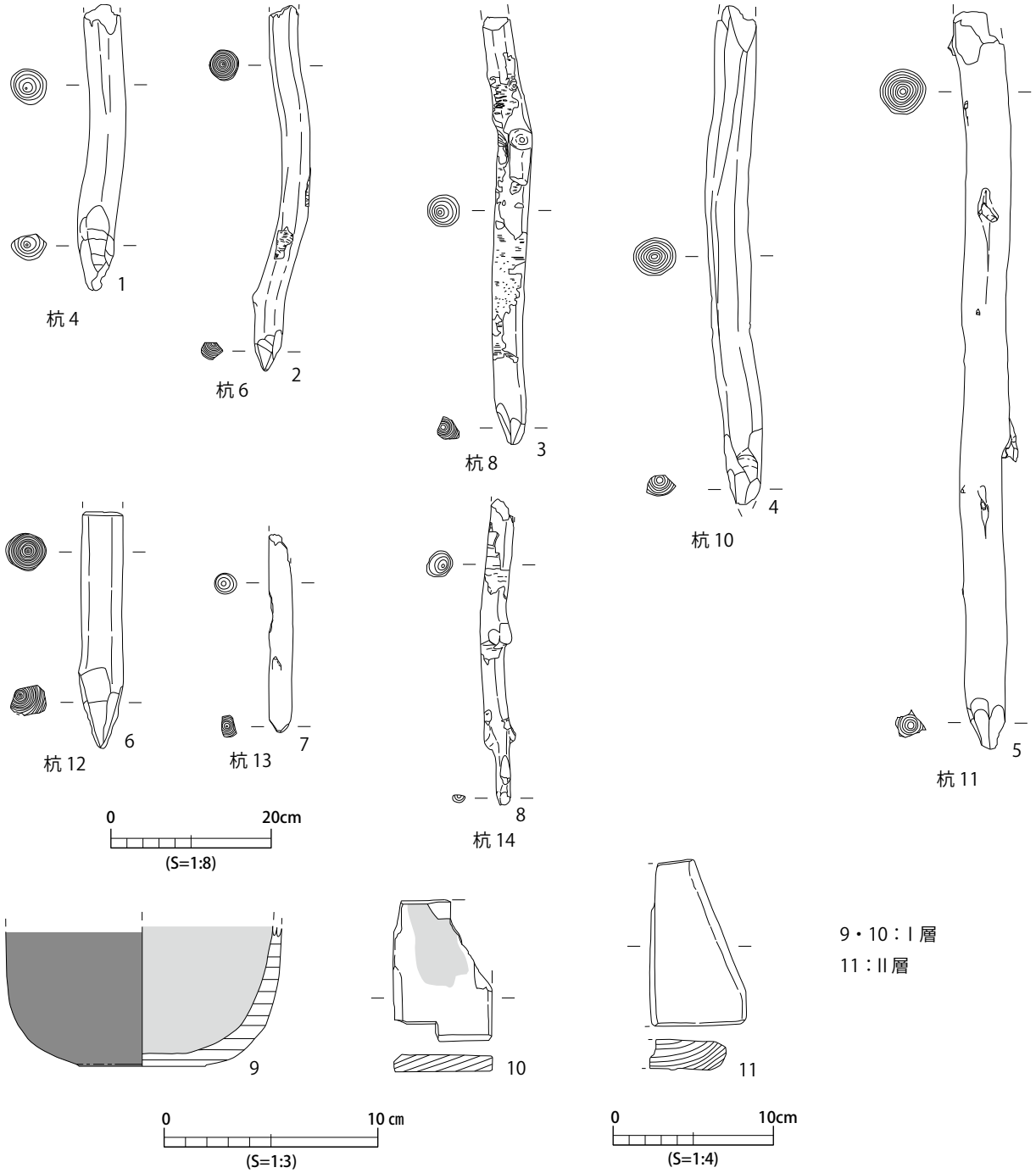


第 20 図　6 区④Ⅰ・Ⅱ層検出杭実測図



第 21 図　6 区④簾状製品出土状態

Ⅳ層は黒色の粘質土層で、弥生時代後期～古代の遺物を含む。6 区①・③・⑤で「シルト系堆積層上部の粘質系の土」とされる層や、6 区⑦の「弥生時代後期後半の遺物包含層」に対応する。本調査区では、Ⅱ層とⅣ層の境界は漸移的でⅡ層下面付近から遺物が出土している。なお、6 区①・③・⑤に見られる「水田耕作土」（6 区⑥のⅢ層）に対応する層序は本調査区では認められなかった。



第 22 図　6 区④Ⅰ・Ⅱ層出土杭・木製品

Ⅴ層は灰色のシルト系堆積層で、この上面で弥生時代後期末頃の遺構を検出している。Ⅴ層中には遺物はほとんど含まれず、この地点においてはシルト層の堆積段階では人間の活動はあまりなかったものと推測できる。

3．Ⅰ～Ⅱ層の調査（第 19 図）

杭列（第 20･22 図）　杭 1 ～杭 12 はⅠ -17 層上面で検出されたものである。「杭列」とするにはそれぞれの間隔が大きく開いている部分もあり、これらを一連のものとみなすかためらわれるところだが、ほぼ直線的に並んでいることからその可能性を考えた。本来はもっと多数の杭が並んでいたが、上層を重機で掘削した際に抜けてしまったのかもしれない。杭がどの面で打ち込まれ

たのかはわからない。杭の並びは、推定される旧伊努谷川の流れ方向に沿っていることから、河川の護岸等に伴うもので、時期は中世後半～近世に属すると推測される。なお、杭４については放射性炭素年代測定を行っており、^{14} C 年代は 350 ± 20yrBP であった[1]。杭の一部を第 22 図に図示したが、これらはいずれも径５㎝前後の丸太材の先端を加工してとがらせたものである。

杭 13・14（第 20・22 図） これらはいずれもⅡ層の掘削途中で検出されたものだが、どの面から打ち込まれたのか特定できない。ただし、Ⅰ -17 層上面では検出されていないので、前述の杭列よりも古いものと考える。杭 13 は調査区の南東隅で、杭列からはずれた地点に位置している。

簾状製品（第 21 図） 調査区東端付近のⅡ層上面で検出した。５本の太さ２㎝程度のアシが簾状に綴じあわされたもので、長さは 2.1m 以上あったとみられる。ただし、北西側は発見時には腐朽してほとんど残っておらず、また、残りも脆弱で取り上げが困難な状態であったため現地で記録するのみにとどめた。

その他の出土遺物（第 22 図） 9･10 はⅠ層の河川堆積層から出土した木製品である。9 は漆器椀で、外面には黒漆が、内面には赤漆が塗られている。底部は体部との間にわずかな段を持つが、高台はなく、平底である。10 は片隅にえぐりが入る板状の木製品で、箱の一部と考えられる。一部に赤い塗料が残る。11 は台形状の平面形を持つ板状木製品で、Ⅱ層から出土した。

４．Ⅳ層～Ⅴ層上面の調査

Ⅳ層からⅤ層上面にかけては弥生時代後期～古代の遺物が出土しており、Ⅴ層上面では竪穴建物状遺構、溝、土坑などの遺構を検出した。Ⅴ層上面のレベルは、1.7 ～ 2.3m で西側に行くにつれて高くなっており、遺構の分布も西側調査区で多く見られる。

（１）検出遺構

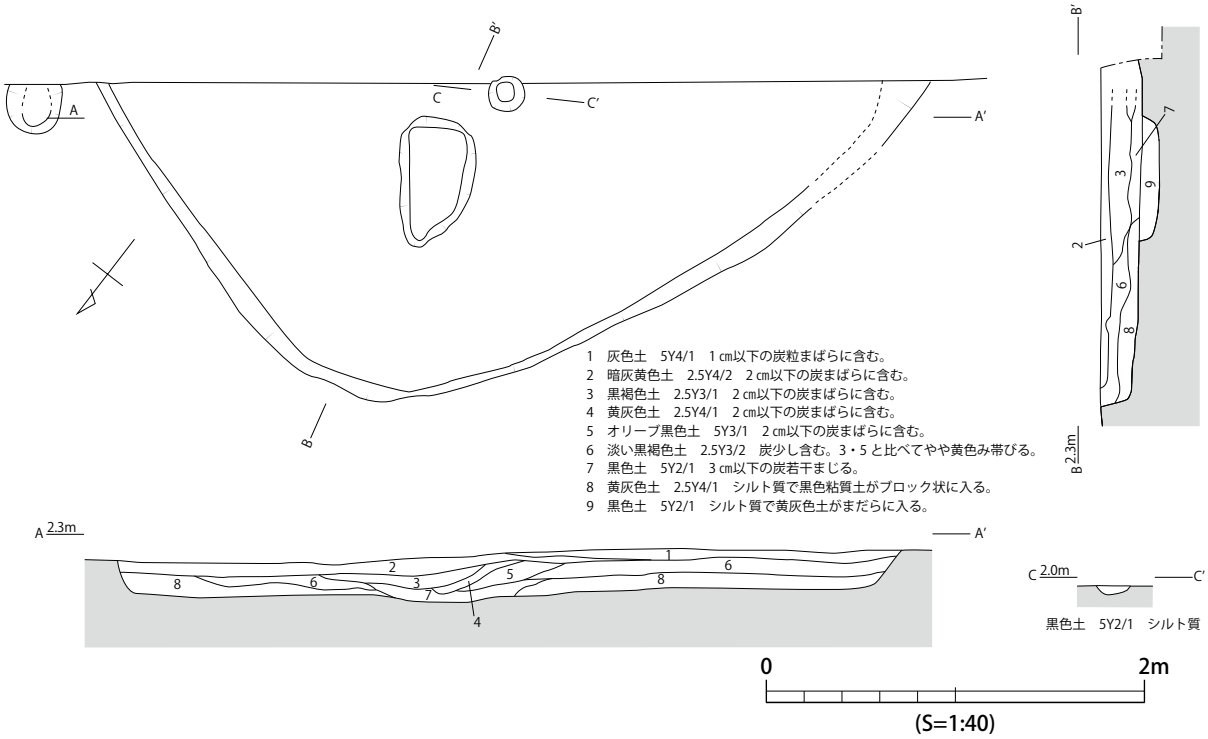
SI01（第 23・24 図） 西側調査区のほぼ中央に位置する竪穴建物状遺構で、南側は調査区外に続くため、全体を調査することはできなかった。検出時には一辺 3.9m 以上の隅丸方形の竪穴建物跡になる可能性を考えたが、床面では、長径 0.7m、短径 0.42m、深さ 0.1m の不整楕円形の土坑と、長径 0.19m、短径 0.17m、深さ 0.05m のピットを検出したのみで、柱穴に相当しうるピットや壁体溝などは確認できなかった。

遺物は、古式土師器片が埋土中から出土している。１は甕の口縁部片で、端部に小さな面を持つ。草田６期に位置づけられよう。２は高坏の脚部片、３は器台の受部片である。これらから、この遺構の時期は弥生時代後期末頃から古墳時代前期初頭と推測される。

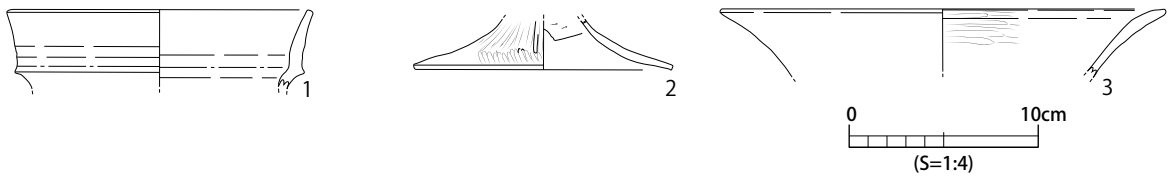
SD02・土器群１（第 25・26 図） SD02 は東側調査区の中央で検出された溝状遺構である。調査区に対して直交する方向にのびており、南北はそれぞれ調査区の周囲に掘った排水溝によって切られている。確認できた長さは 1.5m で、幅 0.7m、深さ 0.05m である。

土器群１は SD02 の検出面よりも上部で確認したもので、長さ 1.8m、幅 0.7 mの範囲に古式土師器片がまとまって出土していた。土器は細かく割れており、おおよその器形をとどめているものがなかったため、遺物の分布範囲のみを記録した。土器群１の出土遺物として第 26 図に３点を図示した。１は口縁部が先細りの甕で、草田４期のもの、２は外面にベンガラが塗布されたボウル形の鉢である。３はコップ形の体部に、短く外反する口縁部が付くもので、内面のほぼ全体と外面

1　６区④及び７区⑤の放射性炭素年代測定は、『山持遺跡 Vol.7（６区）』（島根県教育委員会 2011）を参照されたい。



第 23 図　6 区④ SI01



第 24 図　6 区④ SI01 出土遺物

の一部には漆膜が付着している。漆採取用の容器であろう。

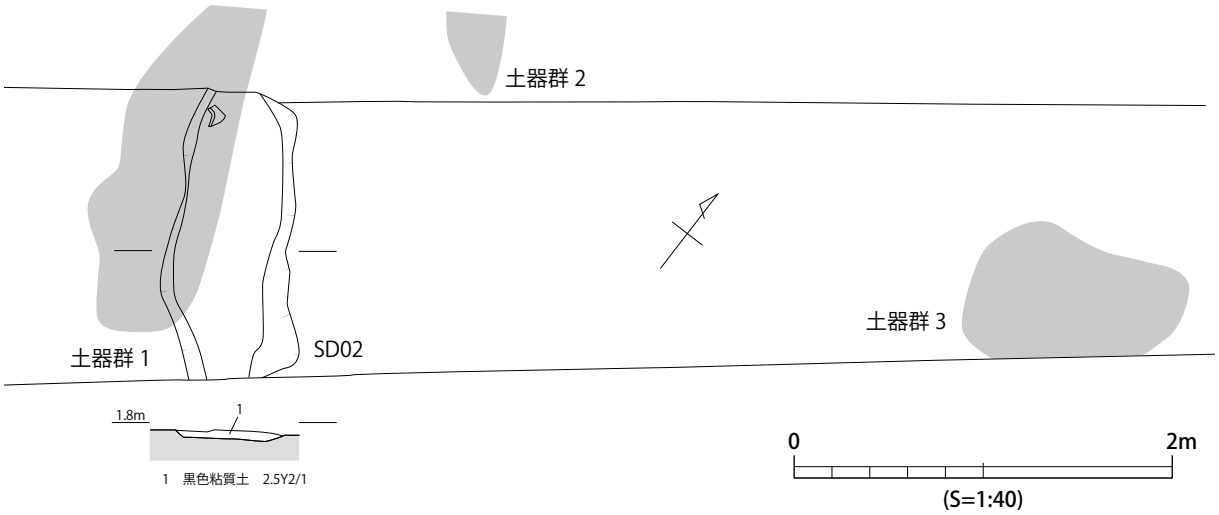
これらの遺物から、SD02 や土器群 1 は弥生時代後期末頃の遺構と考えられる。

土器群 2・3（第 25・26 図）　土器群 2 は SD02 から 1 m ほど東側にあり、0.3m × 0.4m の範囲に土器片がまとまって出土した。土器は細かく割れており、出土時にはもとの器形をうかがうことはできなかったが、その後の整理作業で古式土師器の甕が口縁部から胴部上半まで直径の 1/2 程度復元できた（第 26 図 4）。口縁部は上半がやや内傾する複合口縁もので、端部には面を持っており、肩部には平行直線文が施されている。草田 7 期頃のものとみられる。

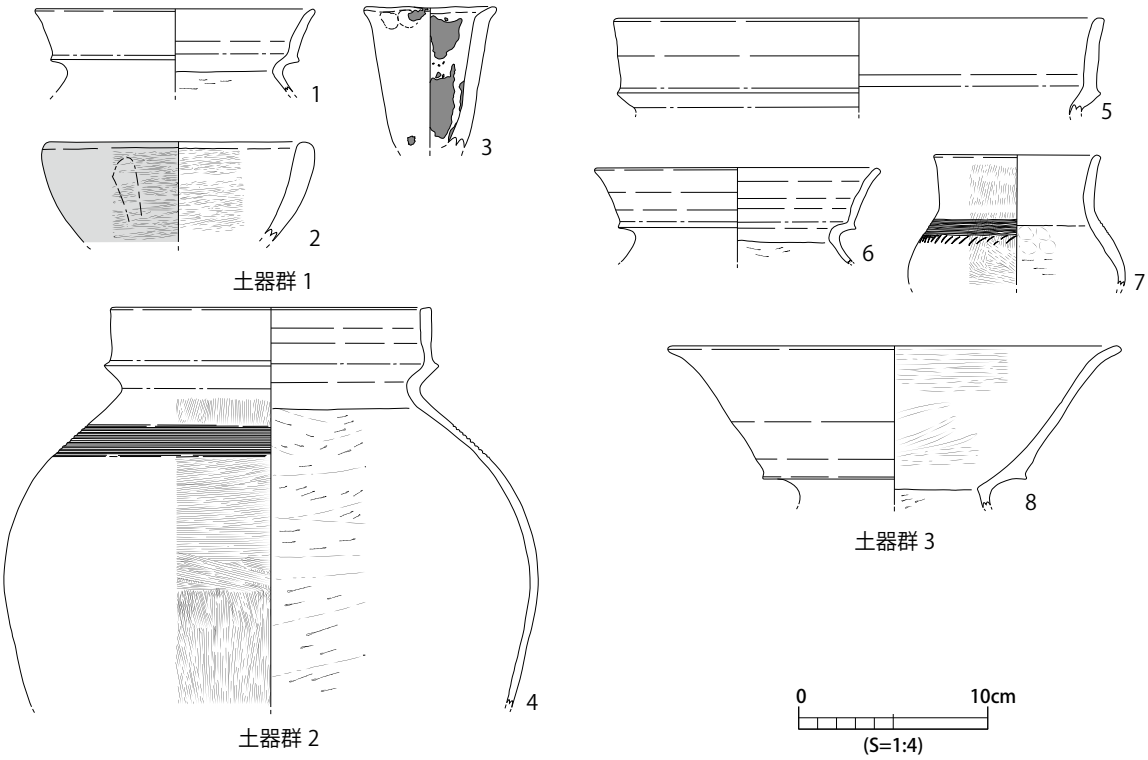
土器群 3 は、SD02 から 4 m 東側にあり、細かく割れた土器片が 1.2m × 0.7m の範囲で検出された。出土遺物として古式土師器 4 点を図示した。5・6 は甕の口縁部で、草田 5 期のものとみられる。7 は直口縁壷で、肩部には平行直線文や、刺突文が巡る。8 は鼓形器台の受部である。

SD03（第 27 図）　西側調査区の中央からやや西寄りに位置し、SI01 を切って掘り込まれた溝状遺構である。南北方向にのびており、南側は調査区周囲の排水溝で切られている。現状での長さは 2 m、幅は 0.5 m、深さは 0.1m である。埋土は黒色土と暗灰黄色土の 2 層に分けられる。

SK01（第 27 図）　東側調査区の西側に位置する。調査区周囲の排水溝で北側が切られており、現状での規模は 0.96m × 0.87m、深さが 0.42m である。北側が高くなってから再び落ち込むかたちになっており、複数の土坑が切り合っていた可能性もある。



第 25 図　6 区④ SD02，土器群 1 ～ 3

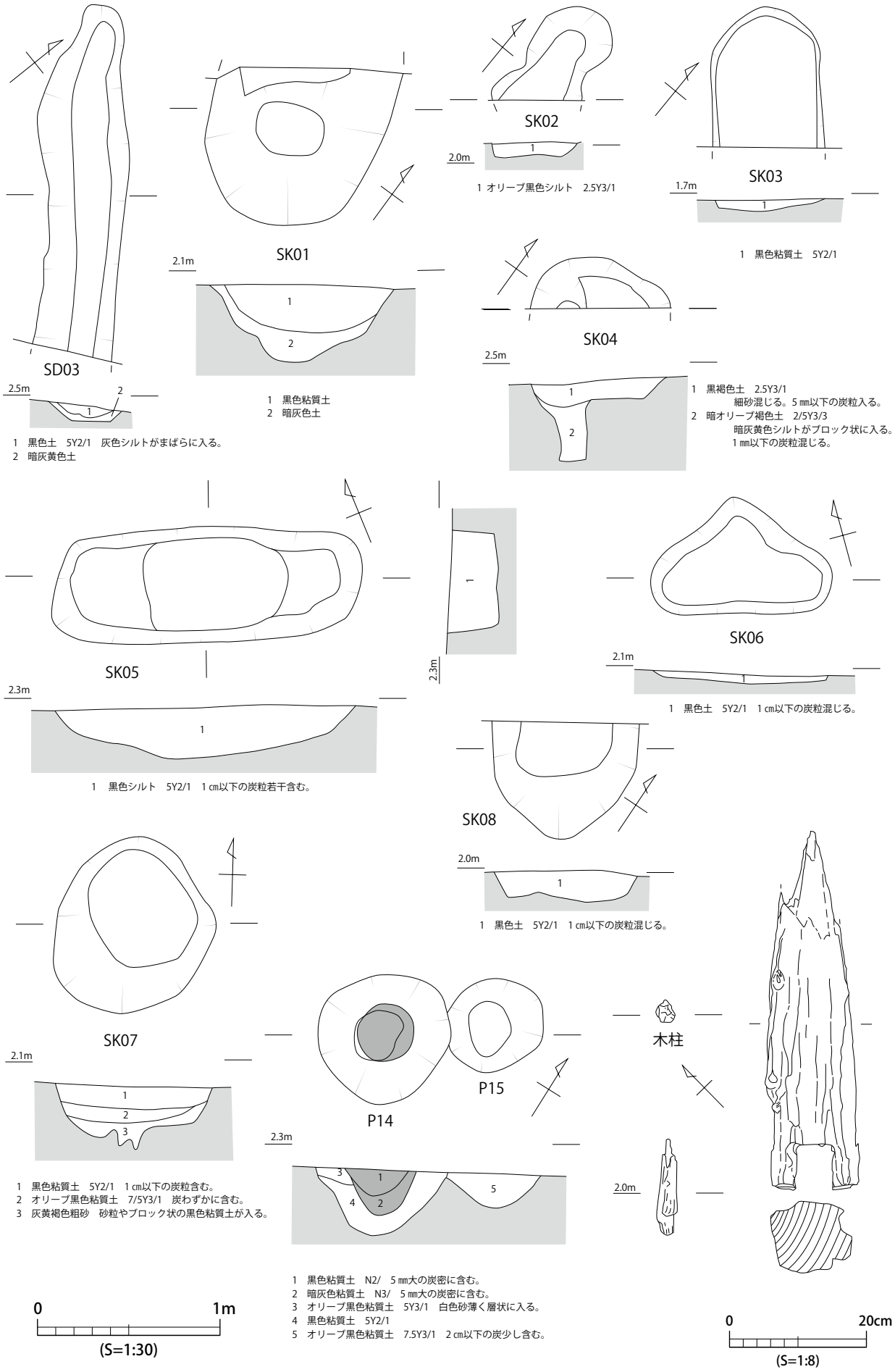


第 26 図　6 区④土器群 1 ～ 3 出土遺物

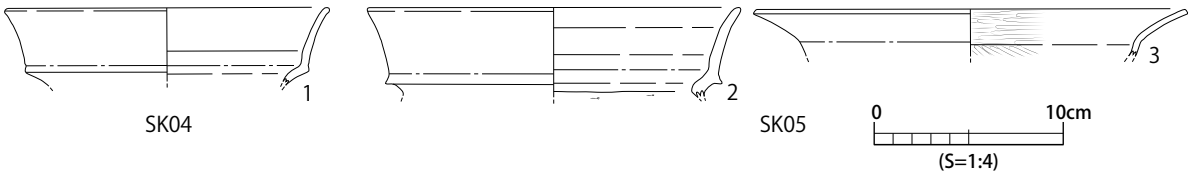
SK02（第 27 図）　SK01 から約 2m 東側に位置する、不整形の土坑である。調査区周囲の排水溝によって北側が切られており、現状での規模は 0.66m ×、0.4m 深さは 0.1m である。

SK03（第 27 図）　東側調査区の東端付近に位置する。現状での長さは 0.8m、幅 0.6m、深さは 0.05m であるが、南側は調査区周囲の排水溝に切れられているため本来の形状は不明である。

SK04（第 27・28 図）　西側調査区の西端近くに位置する。南側が調査区周囲の排水溝によって切られており、本来の形状は不明であるが、現状では東西 0.77m、南北 0.3m の大きさである。底面は 2 段になっており、東側は深さ 0.1m であるのに対し、西側は 0.4m と深くなっている。埋土中から古式土師器片が出土している。第 28 図 1 は複合口縁の甕で、口縁部は全体として薄く、緩やかに外反しており、端部を丸く収めている。草田 5 期のものである。出土遺物から遺構の時期は弥生時代後期末頃と考えられる。



第 27 図 6 区④ SD03、土坑・ピット、木柱



第 28 図　6 区④ SK04・05 出土遺物

SK05（第 27・28 図）　西側調査区で、SD03 から約 2m 西側に位置する。長さ 2.04m、幅 0.63m、深さ 0.27m の隅丸長方形の土坑で、底面からの立ち上がりは、長辺側は垂直に近いかたちであるのに対し、短辺側は緩やかである。埋土中から古式土師器片が出土している。第 28 図 2 は複合口縁の甕で、３は高坏で口縁部は体部から強く屈曲して開くものである。これらは草田 4 期に位置付けられよう。出土遺物からこの遺構の時期は弥生時代後期末頃と推定される。

SK06（第 27 図）　西側調査区の中央からやや東寄りに位置する。長さ 1 m、幅 0.65m、深さ 0.04m の不整形な土坑である。

SK07（第 27 図）　SK06 から約 2.5m 東に位置する。長径 1 m、短径 0.9 m、深さ 0.25m の不整円形の土坑である。埋土は 3 層に分かれる。最下層は黒色粘質土ブロックを含む灰黄褐色粗砂で、部分的に底面に嵌入している。

SK08（第 27 図）　SK07 から約 4 m 東側に位置する。北側を調査区周囲の排水溝に切られており、本来の形状は不明であるが、現状で東西 0.8m、南北 0.65m、深さは 0.18m である。埋土は黒色粘質土で、1 ㎝以下の炭化物粒を含む。

P14・15（第 27 図）　P14 は SI01 から 1.2m 北側に位置する。長径 0.74m、短径 0.72m、深さ 0.35m の不整円形のピットである。検出時には、中央部に炭粒を多く含んだ濃い黒色粘質土が径 0.3m の円形の輪郭を持って現れたため、この部分について柱痕か柱抜き取り痕の可能性を考えたが、土層は凸レンズ状に堆積しており、P14 の埋没後に別のピットが掘り込まれたのかもしれない。

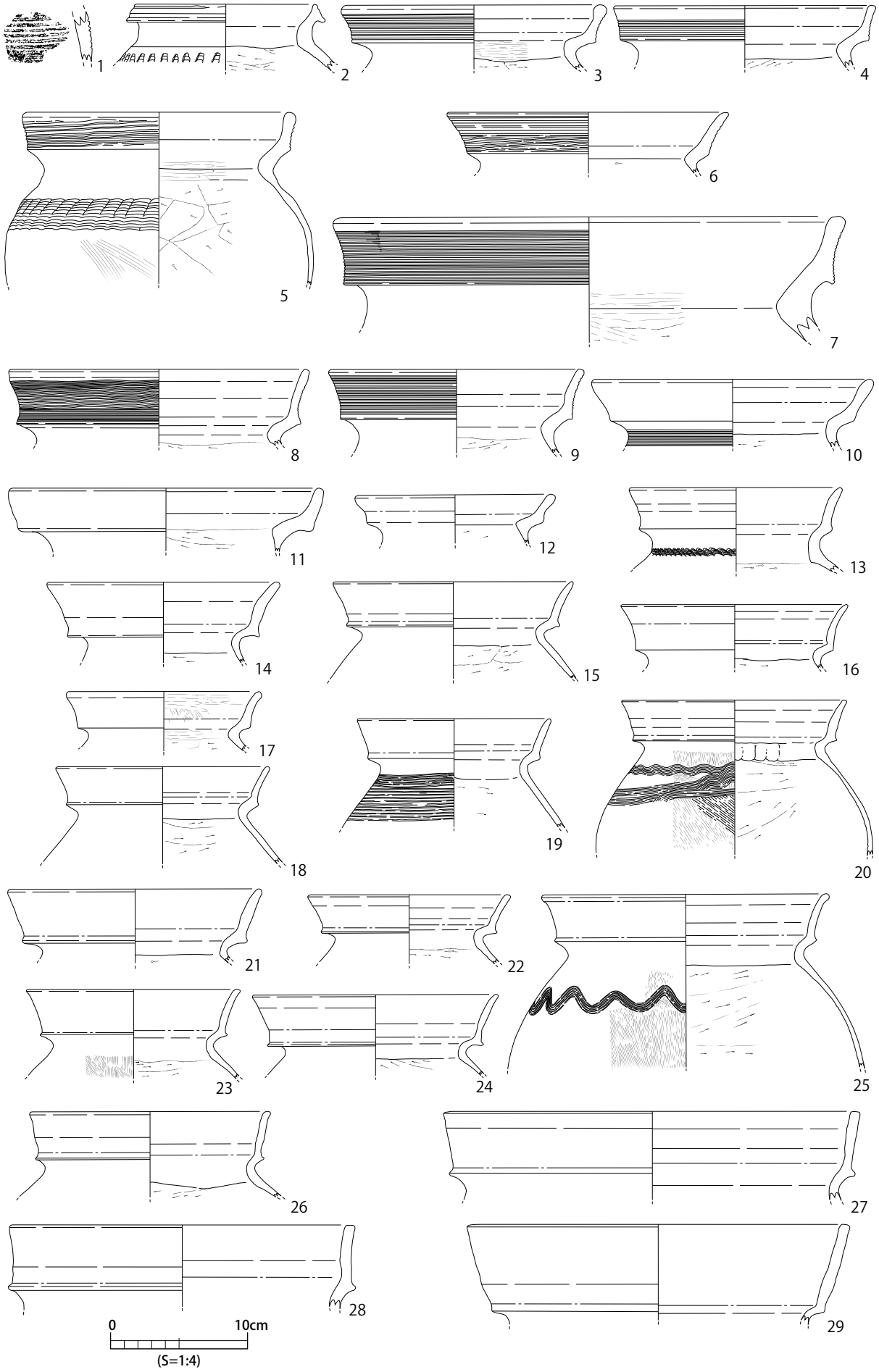
P15 は長径 0.55m、短径 0.5m、深さ 0.2m の不整円形のピットで、P14 に切られている。

木柱（第 27 図）　西側の調査範囲の東端に位置する。残存長 52.2㎝の木柱が立った状態で検出されたもので、周囲を精査したがこれに伴う柱穴は確認できなかった。柱は、大径材を分割して加工したもので、下端には抉りが入れられている。樹種はカヤ属である。

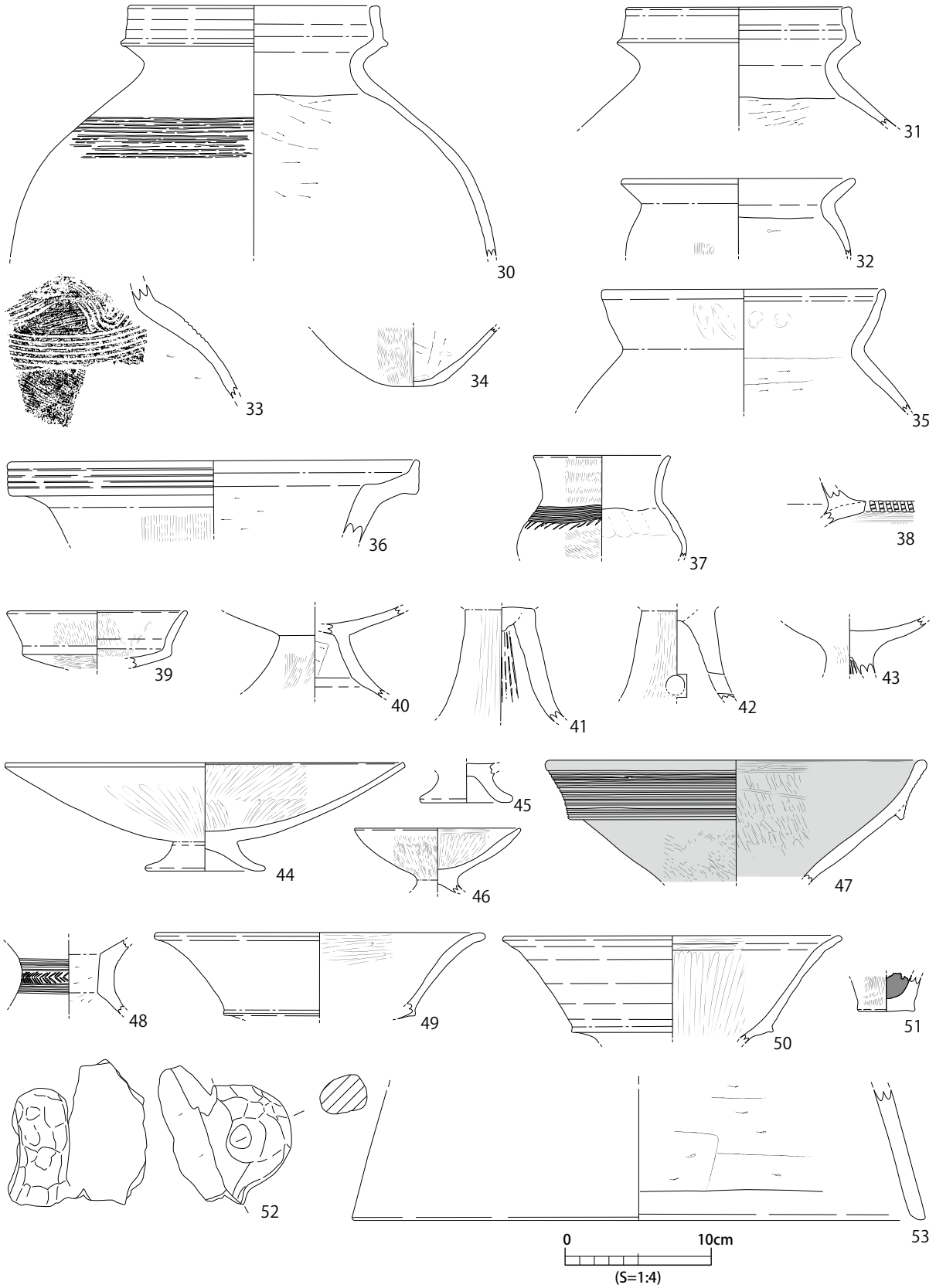
（２）遺構に伴わない遺物（第 29 ～ 32 図）

基本層序の項でもふれたように、Ⅱ層下面付近からⅤ層上面にかけて弥生時代後期から古代の遺物が出土しているが、Ⅱ層からⅣ層の変化は漸移的であることや、下部へ行くほど古い遺物が多くなる傾向はあるものの、取り上げた層位によって明確な時期差を見出しづらいことから、Ⅱ層下部で出土したものもここに含めて説明することとしたい。

弥生土器・古式土師器・土師器（第 29・30 図）　1 ～ 13 は弥生土器の甕である。1 は胴部に櫛描直線文が施されたⅡ様式のものである。2 は短く内傾する口縁部に 2 条の凹線文が入るもので、肩部に刺突文が巡る。Ⅴ - 1 様式に位置付けられる。3 ～ 9 は口縁部に貝殻による平行直線文が施されており、3 ～ 5 はⅤ - 2 様式、6 ～ 9 はⅤ - 3 様式のものと考えられる。5 は肩部に貝殻による押引状の波状文が施されている。10 ～ 13 は無文の複合口縁のものであるが、10 ～ 13 は口縁部が全体に厚みがあることからⅤ - 2 ～ 3 様式に属すると考えた。36 はⅤ - 1 様式の壷で、短く立ち上がる口縁部に、4 条の凹線が巡る。47・48 は器台で、47 はⅤ - 2 様式、48 はⅤ - 3 様式



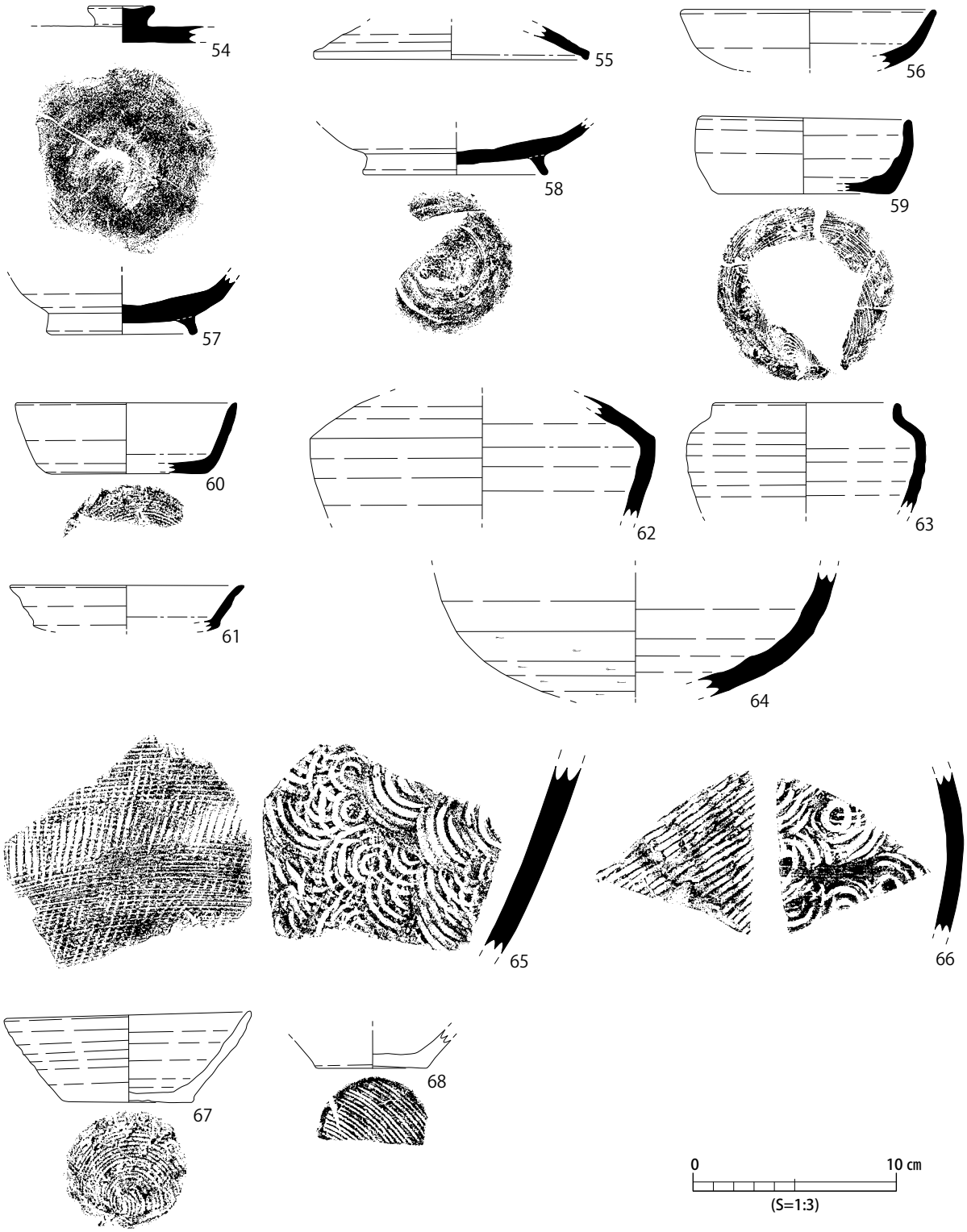
第 29 図　6 区④Ⅳ層出土遺物（1）



第 30 図　6 区④Ⅳ層出土遺物（2）

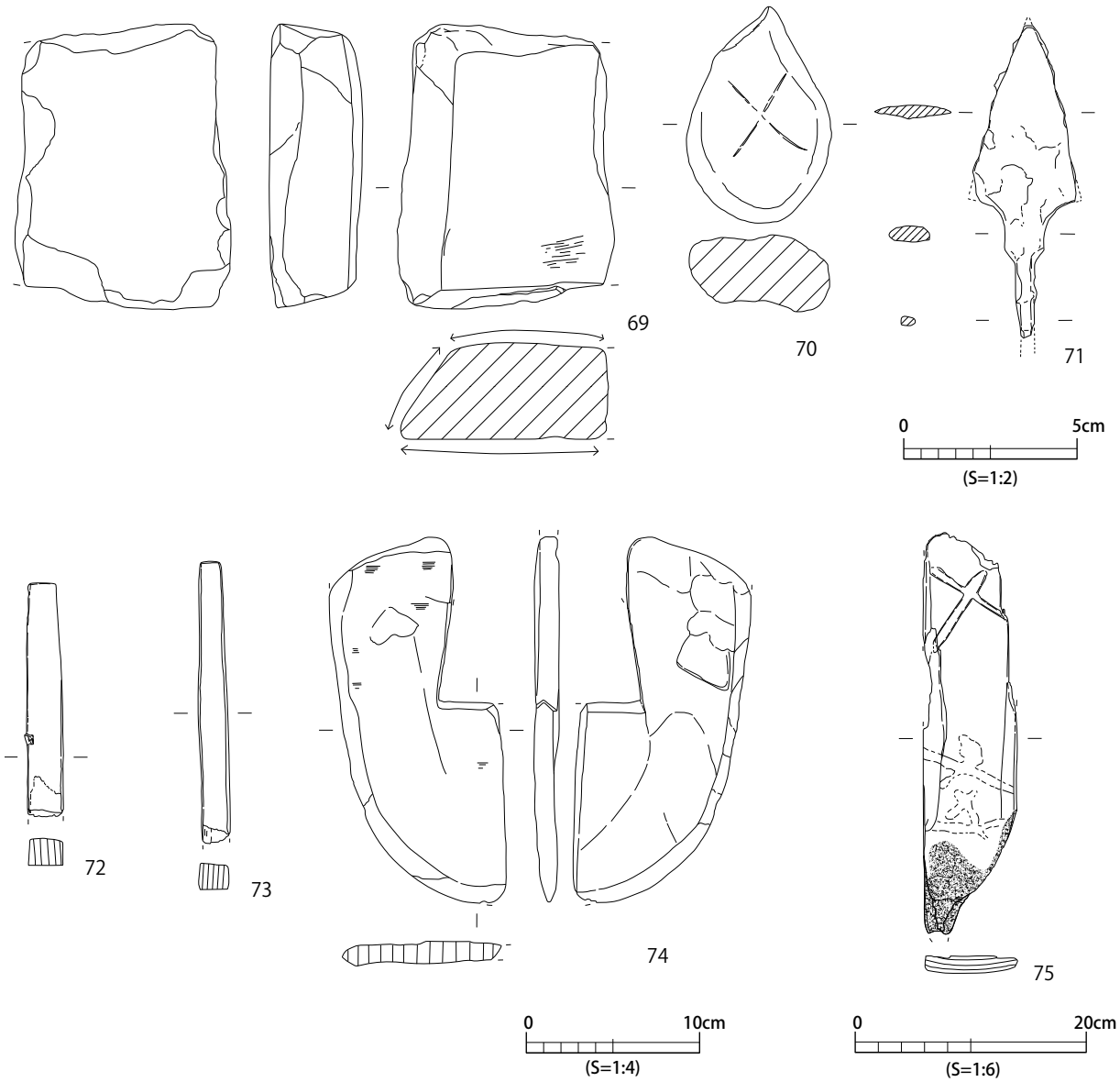
のものである。47 は内外面に赤色顔料（水銀朱）が塗布されている。

14 ～ 32 は古式土師器の甕である。14 ～ 21 は口縁部が外反しながら、先すぼまりになるもので草田 4 期頃に、22 ～ 26 は口縁端部が丸みを持つもので、草田 5 期に位置付けられよう。27 ～



第 31 図　6 区④Ⅳ層出土遺物（3）

29 はやや大型の甕で、口縁端部に面を持つ。草田 5 ～ 6 期のものと推測する。30・31 は口縁部が内傾する複合口縁のもので、口縁端部は肥厚しており、草田 7 期まで下るものとみられる。32 は単純口縁の甕で、胎土に大粒の砂礫を含んでおり、在地のものではなく西部瀬戸内系の土器の可能性がある。33 は壷もしくは甕の肩部で、条間の広い櫛描の直線文と波状文が施されている。34 は壷・甕類の底部で、痕跡的な平底を持つものである。35 は単純口縁の土師器の甕で、口縁端部が内側に肥厚する。古墳時代中期に位置付けられよう。37 は古式土師器の直口縁壷である。



第 32 図　6 区④Ⅳ層出土遺物（4）

38 は口縁部が内傾し、口縁部下端に刺突文が入る複合口縁壷で、西部瀬戸内系の土器と考えられる。39 ～ 42 は古式土師器の高坏、44 ～ 46 は低脚坏、49・50 は鼓形器台、52・53 は甑形土器である。43 は土師器の高坏で、古墳時代中期から後期のものと考えられる。

須恵器・古代の土師器（第 31 図）　54・55 は坏蓋で、岡田編年の出雲ⅣA 期頃のものである。56 ～ 60 は坏身で、56 ～ 58 はⅡ～Ⅲ期、59 はⅢ期以降、60 はⅣA 期のものとみられる。57 は焼成前に内面に「×」の線刻がなされている。61 はⅢ、62 は長頸壷の肩部、63 は短頸壷、64 は鉢である。65・66 は甕の胴部片で、外面に平行タタキ目が、内面には同心円当具痕が残る。67・68 は古代の土師器で、底部切り離しは、67 は回転糸切り、68 は静止糸切りでされている。

石製品（第 32 図）　69 は砥石で、3 面の砥面がある。70 は軽石に「×」の線刻がされている。

鉄製品（第 32 図）　71 は鉄鏃で、二等辺三角形状の鏃身部を持つ。

木製品（第 32 図）　72･73 は角棒状の加工材である。74 は鋤身もしくは鍬身で、材は広葉樹である。着柄のために三角形の穿孔をもつ。75 は板状木製品である。「×」状に周りと比べて少し浮きあがった部分や、色の異なる部分があるが、加工あるいは使用によるものかどうかは不明である。